

# 法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(48)

雨に打たれて、紫陽花がしっとり色づいています。もともと紫陽花は、集まるとい意味の「集つ」と、濃い青色を表す「真藍」が合わさって名付けられたと言われています。小さな花弁は土壌によって青くなったり赤くなったり……さまざま模様を見せられます。雨の日が続くと気分も沈みがちになりますが、美しい花を咲かせる恵みの雨と思えば、心模様も明るくなります。

うらしめり  
菖蒲ぞ香る  
時鳥  
鳴くや五月の雨の夕暮れ

（『新古今集』藤原良経）  
（『湿り気を含んだ空気に、菖蒲が香りを放っている。時鳥が鳴いている、五月の夕暮れよ』）

「梅雨の宵明け」とも言われるように、夕方になると晴れ間が覗くことがあります。夜の帳が下りるとともに、休んでいた嗅覚や聴覚が研ぎ澄まされていくのでしょうか。梅雨時の湿った空気に乗って漂う菖蒲の香りや時鳥の鳴き声に、はつとさせられた驚きが表現されています。

おほかたに  
五月雨るとや  
思ふらむ  
君恋ひわたる  
今日のながめを

夏至は、一年で昼が一番長く、夜が一番短い日。「秋の夜長」とは言いませんが、この「夏の短夜」に皆さんは何を思うでしょうか。

（『和泉式部日記』）  
（あなたはこの雨を、いつもと変わらない五月雨と思つて眺めているのでしょうかね。本当はあなたを恋い慕う私の物思いの涙が、今日の長雨となっているのですよ）

この時期に降る雨を「五月雨」と呼びます。梅雨入りの頃はしとしとと降り、夏至を過ぎて梅雨明け間近になると、時に豪雨となつて降り注ぎます。「五月雨」は「さ乱れ」に通じているように、晴れ間が少なく、長雨が降り籠められる日々が続く中で、心乱れながら物思いに沈んでしまう時間もあるでしょう。

いつまでも降り続く長雨を「淫雨」と言います。「淫」という漢字には「物事に深入りする」「度を越える」という意味があるように、必要以上の雨は歓迎されるものではありません。それは、人間関係においても同様でしょう。例えば男女の仲に亙しても、



雨に打たれ色付く紫陽花(撮影・高岡輝幸氏)

心を寄せる相手を手を想う気持ちは大切ですが、行き過ぎた行動は慎まなければなりません。仏教では、道に外れた邪で節度の無い愛の行為を「邪淫」と説いて戒めています。異性に對する欲望(淫欲)をめぐっては、次のような話があります。昔、和泉の国(今の大阪府和泉市)の国分寺というお寺に、鐘撞きの寺男がいました。いつも鐘を撞いていましたが、その寺に祀られている吉祥天(福德の女神)の絵を見て、いつか恋い慕うようになっていました。数ヶ月を過ぎて、寺男は夢を見ました。いつものように吉祥天女を想っているとき、天女は急に動き出し、「いつも私に想いをかけてくれて嬉しく思いました。私はあなたの妻になりましょう」と語りかけます。次に逢う日を告げられると、夢から覚めたのでした。いよいよ当日のこと。約束の場所に行つてみると、目の前に見目麗しい女房が現れ、寺男に向かって語り始めました。「私はあなたの妻になりました。心をお移してはなりませんよ」と。寺男が受け入れると、新たな二人の生活が始まりました。

## 折り折りの記(82)

### 虎杖や沿線野辺に群れ盛る

波多野 重雄

中央線、京王線の土手や山野、川辺に赤い斑点の茎に卵形の大きい葉を付けた虎杖が群生する。自生は一メートル位。私は子供の頃、若い虎杖の皮を剥ぎ、塩で食べた思い出がある。虎杖は十九世紀に、日本からシーボルト博士が欧州に持ち込み(一八四三)普及した。オランダのライデンに植えられた個体が残っているという。夏には白い花が咲く。園芸用植物としての虎杖は、やがて米国、ロシアなど世界に伝播し、二百年の歴史がある。(高尾山健康登山の会々々)

## 夏遊岬

### 南総音羽山

風月静我好  
斜日催家路  
林中聞啼鳥

里ごころ  
厚木市 荒井 一雄  
つけば家路を急がんと  
林の中にくぐりすの声  
夏、岬に遊ぶ

南総(房総半島中南部地方)、音羽山(清水寺)・・・  
風月 静かなること、  
我 好むごころ・・・  
斜日(夕陽)、家路を催すも、  
林中、鳥(鶯)の啼くのが聞こゆ・・・

## 高尾山参拝

# 五十年ぶりの「半玉」誕生

去る四月二十七日、王子芸妓組合のくるみさん(写真左)が、所属する置屋の「ゆき乃恵」の皆様と参拝に訪れました。本年で十八歳となったくるみさんは、八王子花柳界では、約五十年振りとなる「半玉(芸妓見習い)」として、御座敷に上がるようになりました。師匠の恵さん(写真右)と共に大山御貫首と面会された際には、激励の言葉を頂き、今後一層の精進を誓いました。



消してしまつたのでした。(『古本説話集』下)

裏切りの心を「二心」と言います。寺男が天女に心を寄せる、混じり気のない「一心(直心)」は多くの幸せを呼び込みました。ただその心に亀裂が入つて、あれこれ迷う心(二心)が生じたとき、全ては儚く崩れ去つたのです。二心

ありける人の折る花は

一つ色にも咲かずぞ有りける(『統詞花集』輔親)

「二つの心を持つ人が折つた花は、ただ一色にも咲かないものです」紫陽花は、色が移り変わるから「七変化」とも呼ばれます。花の美容に心を奪われても、「心の変節」を戒め、ただ「一節」に生きなければと誓います。(栃木北部教区普濟寺中)